

---

# 月の欠片が落ちてきた

葉刃 覇羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の欠片が落ちてきた

### 【Nコード】

N4551V

### 【作者名】

葉刃 覇羽

### 【あらすじ】

月の精だとかいう訳の分からない奴に出会って、東海とうかい 光威こういの生活は大いに変容を遂げた。

東海は、その身に宿る『月の欠片』を狙ってくる者たちから身を守り、いつも通りの生活を取り戻すべく奮闘する。

## 第一話：月の精

夜中、夜風に吹かれて散歩をしているときのことだった。視界の端に水たまりの中に怪しげに輝く月が見えた。中々いい月だ、そう思つて空を見上げるとそこには何も無かった。空は厚く雲に覆われ、一等星の輝きも、太陽の輝きによって輝く星の姿も見えなかった。

「……はっ？」

訳が分からなかった。だがしかし、きつと何かの見間違いだったのだろうと思ひ、もう一度水たまりを見る。そこには、明るく輝く月の姿があった。

俺は数分の間、空を見上げ、下を見て、の繰り返しをしていた。傍から見たら変人に思われただろう。

このまま立ち去るのも惜しいと思ひ、いろいろと試行錯誤してみることにした。まずは足で水たまりを触ってみた。水面に波紋が広がり、月の姿が乱れた。

「やめーい、何をするかこのぶれいものおー」

「……………」

時間が止まった、そう思つた瞬間だった。声が聞こえた方向があれなかつたからだ。背後でもなく、前からでもなく、右からでもなく、左からでもない。

水たまりの中から聞こえたのだ。

「……つかれてるのかな、おれ」

そうだ、そうに違ひない。だいたい月がないというのに水たまりに月の姿が映ることなどありえない。だいたい、水たまりから声が聞こえるなどということが、常識的に考えてまずありえない。

「おーい、その若いのー」

だがしかし、これがたとえ幻想だとしても許せないことがあつた。そう、人にはどうしても譲れない事が一つくらいはあるのだ。どんなにバカであつても、どんなに屑であつても、譲れないものが何か

しろあるのだ。

「黙れこの野郎語尾を伸ばすなそれが許せるのはたった一人だそうそれは俺の妹ただ一人俺が愛する妹以外の奴に語尾を伸ばす資格などある訳がなくあつてはいけないのだということをも全人類に伝えるべく俺は今生きているのだということをも胸を張ってただ叫びたいのだが世間の目はとても厳しく兄妹間の愛情と言うものは汚い目で見られることが多く更には哀れみを伴った目で見つめることもしばしばあつてだなそれが俺はどうしても許せなくて仕方がないのだということも分かつてもらえたなら俺は嬉しいのだが」

「分かった！ 私が悪かった、許してくれ。だから私の話を聞いてくれ！」

「 だいたい常識というものは……？」

「姿を現わせば問題あるまい。我の姿を人間に見られるのは問題があるのじゃが、この際は仕方なかったでな」

俺の目の前には、着物姿のものすごい美人が居た。

「……あれ、疲れすぎて幻聴に続いて幻まで見えちゃった？」

「落ちつけ、我は幻などではないぞ」

「いやいや、俺はさっきまで水たまりを蹴り続けて……あれ、月が消えてる」

水たまりに先程まであつた月の姿がなくなつていたのだ。ひたすらに蹴り続けた水たまりは、最初の大きさの3分の1程度まで減つていた。

「……あんたは誰？」

「我は月の精」

俺はその瞬間、衝撃を受けた。

「……ちゅうにびょう？」

「ん？ なんだ、そのチュウニビョウというものは」

「いや、なんでもない、で、あんたは結局なんなんだ？」

「いや、我は月の精であつてな、何故か知らんが地球に来てしまつているのだ」

「ああ、そう。じゃあ頑張って月に帰れよ」

「じゃあな、と言って手を振り、俺は家に帰ることにした。帰って寝て、明日を迎えればきつといつも通りの一日が訪れるはずさ。」

「まてーい！　なぜにそんなに淡泊なのだ。普通はもっと驚いたり、興味を持つたりするはずであらう？」

「……ごめんね、基本、俺は無関心なんだな」

「妹殿には御執着のようだったが」

「ああ、俺には妹なんていないよ。あれはただイライラしたから口走っただけで、まあ気にするな」

「そうか」

と、きょとんとした顔で言う月の精。

「だいたい、面倒事に関わるのは嫌なんでね」

「だがしかし、お主はもう面倒事に巻き込まれているぞ？」

「……はっ？」

「我は月の精。月というのは古来より人々の思いが募るものであった。そして、人の思いが強く、強く、強く集まった月という星に我が産まれた。我は月の精。月の一部である。精霊の力というものは人のそれとは格が違う。故に、一部の人間は精霊の力を求めることがある」

そこで、目の前の月の精は言葉を切った。

「だからなんだよ」

「自慢話みたくなくなってしまふので嫌なのじゃが、精霊が具現化できるということは凄いことだな、つまり何と言うか、我はとても凄いのじゃ。だから、我の力を狙う者などきょうさん居るでな」

「ああ、つまりあんたの力がべらばーに凄くて、だからその力を欲しがる奴がいっぱいいると。で、だからどうしたんだ？　そんなに力を持つてるのならそいつらを蹴散らせばいいし、月にでも帰ればいい」

「それができたら苦労はしないでな。我は月の精であるで、ここは地球。すなわり、我の力は月でのそれと比べて遥かに弱い」

「でも具現化できてんじゃん」  
「それは、月の欠片をそなたが持っておるからじゃ」

月の欠片が落ちてきた。それは普通の石ころとなんら変わりなく、普通の石に見えた。見えたただけだった。その石は普通の石などではなく、月からやってきた石だった。

「いつだっただろう、その石を拾ったのは。」  
「いつだっただろう、それを忘れたのは。」  
「いつだっただろう、どうしてだったのだろう。」

「はっ？ 月の欠片？」

「そうじゃ、月の欠片じゃ。いったいどうしてお主が保持しているのかは知らぬがな」

「俺はそんなの持っていないぞ」

「まったく心辺りがなかった。皆目見当がつかない。」

「いいや、持っておるぞ。いつか、分かるときが来るでな」

「よくわからないが、それは置いておこう。俺が一番聞きたいのはだ、なんで俺が面倒事に巻き込まれることになるんだ？」

「それはだな……奴らが教えてくれるのではないかな」

月の精の視線の先を辿ると、民家の屋根の上に多数の人影が見えた。

「ははっ、ドツキリはやめてほしいなあ、ほんと」

「頑張れ、死ぬ気でやらねば主が死ぬはめになるでな」

「なにそれ」

「手ぶらじゃ流石に哀れじゃから、これを貸そう」

着物の袖から日本刀らしきものを取り出した。どうしたらそんな大きなものが袖などに収まるのだろうか。もう細かいことは考えないようにした。

「そいつで俺は勝てるのか？」

「さてな」

「俺が負けたらお前はどうなる」

「さてな」

「……まあ、ほどほどに頑張るさ」

人間ではないとはいえ、一人の女性を大勢の男が襲うなど胸糞悪い。

「名前はないんだよな、そういえば」

「ああ、我に名前は不要でな」

「名前で呼びたいからさ、なんか考えておけよ」

「善処しよう」

「政治家みたいだな、さて、そろそろしびれを切らしたようだな」  
周りの民家の屋根に見えた人影が動くのが分かった。悪役などがどうして敵に手を出すまで時間を掛けるのか知りたいと思った。

月の精からもらった刀を鞘から抜く。三日月みたく反った綺麗な刀が現れた。刀は重いモノと聞いていたが、思ったよりも軽かった。

「我らは夜光鴉。貴殿の月の欠片を頂戴しに参った」

おいおい、話が違う。こいつらの狙いは月の精じゃなくて、俺じやねえか。

「俺は月の欠片なんて持ってないぞ」

「黙れ、主が何を言おうと我らは騙されぬ。我らの悲願が今宵達される！」

一番乗りの奴が俺に斬りかかる。これまでの人生で喧嘩らしい喧

嘩などしたことがなかった。戦い方が全く分からないが、がむしやらに戦うことにした。

相手も刀をつかつてくるしい。上段斬りを横に跳ねてかわす。が、振り下ろした刀を横に薙いで来た。慌てて左手に持った鞘でガードする

「なっ!?!」

相手も驚いたようだが、俺も相当に驚いた。鞘で刀の直撃を避けようとしただけなのに、刀が鞘に触れた瞬間に刀が爆ぜたのだ。刀身が爆ぜ、その破片が辺りに散らばる。幸い、俺には粉々になった破片が刺さることはなかったが、刀の持ち主には相当数の破片が刺さったらしく、至る所から血が流れ出ていた。

そして、その破片は持ち主だけでなく、周りに居たその仲間の体にも襲いかかっていた。

ただ鞘でガードしただけなのに俺は勝利を収めた。一瞬の出来事で夜光鴉とか名乗った一味は退散していった。血だらけの奴を体格のいい奴が抱え、闇に消えるように去って行った。

「……なんか、呆気なかったな」

「運がよかったでな。流石は月の欠片と言った所か」

「よくは分かんが、というかな、奴らの狙いはお前じゃなくて俺じゃね?」

「そうとも言うかもしれんな」

「なんかもうよくわからなさ過ぎてどうでもよくなってきた」

「だから、と言葉を続けた。」

「俺は家に帰る。お前も来るか?」

「行くでしょうかな」

「女を家に入れるのは久しぶりだな、というか初めてか?」

「夜風で体が冷える。早く案内せい」

「……………」

なんだか返す言葉がなかった。もう、一刻も早く寝たかった。温かい布団で寝たかった。一夜にして俺の平穏が崩れた。いつも通り

の当たり前が崩れてしまった。けれど、いつからはその崩れた当たり前に慣れて、新しい当たり前が始まって、それにも直に慣れてしまふのだらうと思う。

「そういえば、名前は思いついたか」

「ああ……考える時間もなかったでな……」

「そうか、考えてなかったのか、ならばしかたない」

「おう？」

「家に着くまでの間に考えておけよ」

「主が考えてくれるとかはないのか？」

「ありえないな」

「ふむ、考えてやろう」

そして、夜風に吹かれながら俺のアパートに向けて二人の大人がアスファルトを蹴って歩き続けた。一人は着物、一人は刀を手にして。

アパートにつくと、安堵したのか疲れがどつときた。

「俺はもう寝る。お前は どうする？」

「我は……することもないでな、寝る」

そういうと、月の精は姿を消した。名前を聞くのを忘れた、と思ったが、迫りくる眠気には勝てない。だいたい目の前にはベッドがあるのだ。誘惑に勝てと言うのが無理な話である。

俺は刀をそこらへんに放りだし、ベッドにもぐりこんだ。疲れた体に布団は心地よかった。まさに天国といった感じだ。すぐに眠気がやってきて、俺は睡魔に抗うことをせず、眠りに就いた。

## 第二話：崇柱家の使い

朝、目が覚めると、いつも通りの天井が目に入ってきた。二度寝はしない主義なので、すぐに布団から出る。両手を伸ばして体を伸ばす。心地よい目覚めを迎えられたことを喜び、俺は光が薄らと透過しているカーテンを開ける。窓を開けると、朝の空気が部屋に流れ込んできた。それもまた気持ちいい。

何か飲み物を飲もうとリビングへと向かう途中、足元に変なモノが映った。それは日本人の魂でもあったもの。

日本刀

それが、ごく普通の日本人の寝室の床に転がっている。何とも変な光景だ。それを見た瞬間、俺は現実を引き戻されたと感じた。いつも通りの日常という幻想は砕かれ、容赦のない現実を突きつけられる。が、その現実の方が現実味を帯びていないのはどういうことか。

「……もう訳が分からん」

ぼやいてみても、現実是不変ならない。

しかし、こんな穏やかな朝を迎えて見て思う。俺の日常は特に変わることはないのではないかと。昨日の夜の一件で全てが終わったのではないか。そう思える状況だった。

だいたい、解決すべき問題が分からないのだ。俺がどういう立ち位置に居るのが分からない。RPGみたく解決すべき問題が向こう側からやってくるようならいいのだが、それも今はなさそうである。

と、考えた所ひとつ忘れていたことを思い出した。

「月の精出てこいよ」

だがしかし、何も起こらない。部屋の中には間抜け奴が一人居るだけだ。はたから見たら俺は中二病患者そのものだ。

誰だ、そこに居るのは分かっている。出てこい。

まさに目を覆いたくなるセリフだ。誰も居ない虚空にそのセリフを吐いた暁には、もう穴があれば入りたい気持ちになるだろう。だいたい、今の俺がそんな状況だ。誰も見ていないのは分かっているのに、恥ずかしくて顔が紅潮してるかもしれない。

「どうした、顔が心なしが赤いようだが、風でも引いたか」

「……………」

「どうした？」

「呼んだらすぐ出てこいよ！ 恥ずかしくてたまらなかつたぞ」

「さて、要件はなにかな」

「要件と言われても、いろいろと聞きたいことが多すぎてな」

「焦らず一つ一つ解決していけばいいだろうに」

「千里の道も一歩からと言うしな、よし。じゃあ、初めに月の欠片ってなんなんだ？」

「ふむ、月の欠片とな。月の大地には力が集中している特異点がいくつか存在しているのだがな。特異点の中心には力の源泉ともいえる石が存在するのじゃ。その欠片が月の欠片というわけじゃな」

「でだ、俺はその月の欠片とかいうものに全く心辺りがないんだが」

「そりゃそうだろう。普通は人の目では認識できない存在であるし「だからさ、月の欠片はどこにあるんだ？」

「簡単に言つとだな、魂の中とでも」

「タマシイ？」

「そうじゃ、魂。月の欠片は力の塊じゃ。力ゆえに物質としては存在しえない」

「月の欠片を分離することは？」

「まず無理じゃな」

「おいおい、冗談はよしてくれよ。それじゃあ、俺は生きている限りアイツらに命を狙われることになるじゃないか」

「そうじゃな」

「そうじゃな、じゃねーよ。あんたは月の精なんだろ？ なんとかしてくれよ」

「なんとかと言われてもな、月に共に行けるならどうにかできなくもないんじゃないか」

月に行け、そう言われて行ける訳がない。

「おいおい、物語に関わるなら俺は主人公ではなく脇役ポジションで甘い蜜を吸ってる役がよかったのにな、ちくしょー……」

「……何を言ってるのか我には分からぬ」

「……だいたい、何で今更になって夜光鴉とかいう奴らは俺の月の欠片に気づいたんだ？」

「それは我と関係を持ったからじゃろう」

「……その言い方は誤解を招くな」

「ん？」

「いや、説明を続けてくれ」

「何度も言っているように、我は月の精じゃ。恐らく我の存在により、月の欠片が力を増したのじゃろう。月から遠く離れた地ではその力も幾分か落ちるから、今までは気づかれなかったのじゃろう」

「じゃあ、俺の命が危ないのはあんたの所為というわけか」

「元はお主が月の欠片を身に宿したのが原因じゃがな」

「だいたい、何で俺がその月の欠片とかを宿しちゃったわけさ」

「さてな、我にも皆目見当がつかないでな」

「なあ、一つ相談に乗って欲しいことがある」

「……言うてみい」

「俺はこれから何をすればいいんだ？」

「それは我の方が聞きたい」

そして、俺たちは同時にため息をついた。

月の欠片が落ちてきた。

それはとても、とても綺麗に見えた。

手を伸ばせば届く所に有る。

それを、ただ見つめていた。

ネットサーフィンをひたすらしていた俺に向かって、月の精が声を掛けてきた。

「お主は何か仕事などをしなくていいのか？」

「ああ、大学生だし、それに今は春休みなんだから。時間だけはたっぷりある」

「そうか。さて、我は特にすることもないでな、寝る」

そう言い、月の精は姿を消そうとしたので、俺はそうはさせまいと声を掛ける。

「おい」

「なんじゃ」

「名前、考えたか」

「……寝る」

そして姿を消した。やはり名前など考えてなかったのだろう。

「なにすっかなー」

ネットサーフィンも飽きてきた。かといって、特にしたいことなく、椅子に座ってぼーっとしていたとき、インターホンが鳴った。

「誰だ？」

玄関まで赴き、のぞき穴を覗いた。そこには、見知らぬスーツ姿の男性が居た。何かの勧誘だろうか、と思いながらドアを開けた。

「あの、東海 光威様でしょうか？」

「そうですか、貴方は？」

「ああ！ 失礼、申し遅れました。わたくし、奏泉 平介と申します。本日は崇柱家現当主、崇柱 美邦様の使いとして参りました」

「……………」

「あの、どうしました？」

このとき、俺は心の中で叫んでいた。キタ、とただ絶叫していた。もう、いかにもな感じの人がやってきたのだ。解決すべき問題が向こう側からやってきたのだ。嬉しくない筈がない。なにをどうしたらいいのか分からないと嘆いていた矢先に来たのだ、俺は一瞬だけ神を信じた。

「いや、なんでもないですよ。で、ご用件は何でしょうか？」

「はい。今日はお暇でしょうか？」

「はいはい、もう暇で暇で仕方がなかった所なんですよ」

そう言うと、目の前の青年は嬉しそうに笑った。

「それはよかったです！ あの、今から出かけられますでしょうか」

「ええ、勿論です。ちよつと待つてください。すぐに出かける準備をします」

「はい。それと、ゆっくりでも大丈夫ですよ」

玄関を閉め、部屋へと戻る。出かける準備といっても、特に持つていくものなどなかった。財布に携帯。

「どうするか、これ」

リビングのテーブルに置かれているのは日本刀。しかし、これを持つていくのは憚られた。だがしかし、もしものことを考えて持つて行った方がいいのだろう。

「どこへ行く」

「ああ、月の精。お前も来るかつと、その前に一つ聞いておこう。

お前の姿は一般人にも見えるのか？」

「いや、恐らくお前にしか見えんだろう」

「そうか、じゃあさ、この刀持つててくれないか。流石に日本刀を持つて出歩くのはちときつい」

と言った所で気づいた。この刀、俺のじゃねえや、こいつのじゃん。

「間違えた。この刀、お前に返すわ」

「必要なときには貸すでな、遠慮なく言うがよいぞ」

月の精は刀をまた袖にしまった。恐らく、四次元なんちゃらと同じような機能を持っているのだろう、と心の中で一人納得していた。「さて、私の姿が見えないのではお主も心配じゃろう。何かいいものはないかの」

キョロキョロと部屋を見回す月の精。早く名前を考えて欲しいものだ。

「それがいい」

その視線の先、それは俺の手だった。

「その指輪じゃよ」

「これか？」

「その指輪に宿ることにしよう」

そう言つと、ぱつと姿を消した。そして、俺の右手の小指にはめられた指輪が青白く光を放ち、次第にその光の強さが落ちていった。

「……………行くか」

外に出ると、スーツ姿の青年がタバコを吸っていた。

「ああ、終わりましたか。では行きましょう」

携帯灰皿でタバコを片づけた青年と共に、俺たちは階段を下りた。

「どうぞ、乗ってください」

「後部座席でいいかな」

「どうぞ」

そして、俺は奏泉くんの車の後部座席に乗り込んだ。

「では参ります」

俺は思った。なんて不用心なんだろうと。俺も、彼も。彼は具体的な要件を何も言っていない。そして、俺もだ。彼に何も訊いていない。まあ、タイミング的にどんな要件なのかは簡単に想像はできるのだが。

「なあ、崇柱家って何なんだ？」

「ご存知ではありませんでしたか」

「ごめんね知らなくて、と言いたかったが言わなかった。

「崇柱家は……いえ、私が語る訳にはいけないので、すみません」

「いや、別にいいけど」

おいおい、なんなんだよ。別に語ってくれても俺は一向に構わな  
いんだけど。見知らぬ人の車に乗り込んでしまったことに恐怖を感じないといえばウソになるが、昨日の戦闘で少しばかり『俺は強い』  
と思ってしまうので、根拠のない優越感を抱いていた。なので、そこまで恐怖はなかった。だから、見知らぬ人のいきなりのお

誘いに乗ったのだ。いざとなったらあの刀でなんとかしてやるう、  
そう思っていた。

「そうだ、俺は何で招待されたんだ」

「察しはついていると思いますが」

「ああ、そうだな」

もう君には何も尋ねないさ。俺は流れゆく風景を窓越しに見て過  
ごすことにした。しかし、風景も何も無い。都会の風景はつまらな  
い。俺は風流を愛する雅な人間なのだ。人工物に心動かされること  
などないさ。と心の中で恰好つけた。

「着くまで寝ても構わないかな」

「ええ、どうぞ。まだまだ時間がかかりますので」

「じゃあ遠慮なく」

寝首をかかれるかと少し心配したが、もうなんか面倒になってき  
たので寝ることにした。気が滅入ったときは寝るに限る。

けて心地よくはない振動に身を任せ、暗闇の世界に落ちる。そ  
して、眠りに落ちるまでの間、思考を続ける。

月の欠片とかいう訳の分からないファンタジックなモノを、なぜ  
俺が持っているのかということ。

月の精という得体の知れない和風な美人は、なぜ月から地球へと  
来てしまったのか。

昨夜、俺を襲撃した夜光鴉という奴らの素性、目的などはなんな  
のか。

そして、俺はこれからどうなるのか。

どれも、情報が少なすぎて今の俺では答えを得ることは難しいモ  
ノだということには分かった。というか、それだけしか分からない。  
いや、ここで諦めたらいけない。どこかの名探偵たちみたいに、少な  
い手掛かりから順々に辿って行けば何かを知ることができるはずだ、  
きっと。

まず、俺に起きたことを整理しよう。始まりは昨日の夜だ。空は  
曇っていたのに水たまりには月の姿がはっきりと映っていた。それ

は、月の精とかいう奴がそこに居たからなのだろう、と推測できる。月の精がどうして地球にやってきたのか。

月の欠片に引かれてきた。

だが、それは考えにくかった。奴の話を聞く限り、月には俺の中にある月の欠片の元となるモノがあるという。ならば、その欠片が地球にあるとあって、こちらにやってくる訳がないだろう。それに引かれて来たのなら、どうしてあの水たまりに居たというのか。

それと、夜光鴉。どうして奴らは昨夜、あの場所に、あの時間、集団で居たのだろう。奴らは俺を狙っていた。どうして月の精ではなく俺を狙ったのか。俺の方が、つまり月の欠片の方が価値がある。もしくは、月の精の存在を奴らは感知できなかった。

そうだ、それならば奴らが俺を狙った訳に納得できる。

しかし、月の欠片を認知できたのならば、どうしてそれよりも力が強そうな月の精を認知できなかったのだろう。

地球では力が弱まるから、なのだろうか。

今の俺が持っている情報では、これ以上の推測はできなさそうだ。もう考えるのもだるくなってきたので、何も考えずに寝ることにした。

月の欠片が落ちてきた。

どこから落ちてきた。

そして、それは墮ちた。

“落”ではなく“墮”。

聖なるモノは、邪なるモノに。

必然は偶然に、偶然は必然に。



### 第三話：想力重界

「着きましたよ」

「……んあ？」

「到着です」

奏泉くんに起こされた俺は間抜けな声を出した。まだ寝ていたいと訴える脳を精神力でなんとか抑え、俺は車の扉を開け外に出た。

「あー」

と体を伸ばす。ばきばきと体が音を立てる。それが妙に心地よかった。

「……でけえ」

「はい、そうですね。私も初めてここに来たときはその大きさに度肝を抜かれました」

そう言っつて青年は笑う。

「ははっ、そう」

やはり、古くから続く歴史ある家は豪邸というのが常識なのだろうか。それにしても、でかい家だ。敷地も広いし家もでかい。だが、このでかさを表現する言葉を俺は持ち合わせていなかった。それが少し悔やまれる。

「では、参りましょう」

そう言っつて青年は歩き始めた。

「なあ、俺はその当主とやらにあつたら何をされるんだ？」

「される？」

「いや、俺をここに招待するなんて、なんかよっぽどなことなんだろう？」

「……私の口からは何も、すみません」

といい青年は軽く頭を下げた。

「いいよ、べつに」

そうだったそうだった。まったく、俺は何で奏泉くんに見つけたの

だろう。この青年は肝心なことは何も答えてくれなかったじゃないか。それに、この青年には何も訊かないと車の中で決めたというのに。

「ふう、なんか菓子ぐらいはでたりするのかな」

「もしよろしければ、今夜は泊まったらいかがでしょう？」

夕飯でも食ってけ、とでも言いたいのか、青年よ。

「……いや、遠慮しておこう」

だが、その誘いには乗らんよ。

「そうですか」

そして、また沈黙が続く。とはいえ、もう目の前には玄関が近づいている。

「どうぞ」

といい青年は扉を開けてくれた。俺は遠慮なく中に入った。靴を脱いで上がる。後ろから青年も続いた。

「こちらです」

青年の後をただ続いて歩く。ううむ、青年の歩くスピードが鈍いのが少しイライラしてしまう。が、仕方ない。そういえば、友人たちは何度か『歩くの早っ！』と言われたことがあるのを思い出す。そこまで早いだろうか。俺以外の奴が歩くのが遅すぎるだけではないかと思うのだが。

「では、私はここで」

といい、青年はどこかへと行ってしまった。

「ここに入れてか」

目の前の襖を開けて中に入る。

「……来たか」

来ましたよ。ノコノコと知らない人の車に乗ってね。よい子は真似してはいけないことをやりましたよ。と、心の中で軽口を叩いた。

「こちらへ」

と言われたので俺はその人の前に行き、座った。

そして、お互いの自己紹介というステップを飛ばして質問する。

「俺は自分に何が起きてるのかさっぱり分かっていないんだ。あんなは何を知ってるんだ？」

「……ふむ。何も知らないと来たか」

目の前のご老人。とても風格漂う佇まいをしている。もしも、これが某野球ゲームのキャラであるなら、あの間接を持っていない人間が行う野球ゲームなら、威圧感という特殊能力を持っていることは間違いないだろう。

「まあ、そうだろう」

そうかいそうかい。というか、勿体ぶらずにさっさと話を進めてくれないかい爺さんよ。

「何から話をしようか」

おいおい、ボケてんのか。俺が来るまでの間、一体なにをしていたんだよ。

「なぜ、俺をここに呼んだ？」

敬語など使わない。理由は、特にない。強いて言うならば、使いたくないからだ。

「……夜光鴉を知ってるか」

「ああ、知ってるよ。昨日の夜、なんかいきなり襲われた」

「そうか、もう動いているとは……」

いちいち沈黙するなって、と言いたい気分だ。

「……君を今日ここに呼んだのはだね、」

爺さんはそこで表情を濁した。

「君の月の欠片があるべき姿に還さねばならない事態になっているからなのだよ」

「あるべき姿？」

「月の欠片とは、月の力そのものと言ってしまっただけの問題ない。月は太古の昔から人々が想いを馳せる、寄せる星だった。ときには信仰の対象にもなった。数多くの神話も産まれた。人の長い歴史の中で最も身近な星の一つだ」

「そんな解説は求めてない。俺はこれから何をすればいい。これか

ら何ができる。あんたに何ができる。それだけ教えてくれよ」

「……ふむ、面白いな少年」

「ははっ、そうかい」

俺は爺さんなんかと話しても何も楽しくなんてないけどな。

「この年になり、それなりの地位となってしまうとな、変にへりくだった話し方をする奴がいてつまらぬのだよ。お主みたいに率直に言う奴は好きなのだけだな」

「……あんたに好かれても嬉しくないな」

「それもそうだろう」

無駄話はやめにしよう、そう爺さんが言った。

「主はまだ死にたくはないだろう？」

「当たり前だ」

「うむ。主が死んでくれれば一番収まりがよいのだが。仕方あるまい」

「あんたら崇柱家が頑張れば俺を殺せるんじゃないのか」

「月の欠片を保持している君に勝てる者はおらんよ」

「……あんたは？」

「もう年だよ。それにな、面白い奴が死ぬのは嫌いなのだよ」

「そうかい」

「少し話が長くなるが聞いてほしい」

爺さんはそういい、話を始めた。無駄をできる限り削るようにするが、やはり年になると無駄に話を長くするのが楽しくなるのだよ、と無駄なことを初めに言ってきた。もう、無駄を省けとはこの人には言つまり。

爺さんが言うに 月の欠片の有るべき姿。それは、月の力が集中している特異点に反し、力の源泉に戻るのだという。要するに、もともと居た場所に還すということらしい。

月の欠片を俺が保持することにより引き起こされる問題。それは、濃い月の力が地球にあることで、地球上に存在している安定した想象力重界が崩壊を初めてしまうことになるからだという。

爺さんに話の最中は突っ込むな、と言われたが、知らない単語の説明なしに話をされても理解できない。だから『想力重界』とは何かと口をはさんだ。機嫌を損ねるかな、と思っただが『ああ、すまん。この業界に通じてない者には縁のない言葉だった』といい、説明してくれた。どうやら機嫌を損ねることはなかったらしい。

想力重界。それは、人の想いの力が重なる世界。なんのこっちゃ、と言いたくなる。

爺さんの話によると、人の想いの力とはとても凄いらしい。今まで人類が生きていた長い時間、その間に生きた人の想いが段々と地球上に溜まり、それが溜まりに溜まって一つの世界を作ったらしい、地球上に。地球の表面を覆うようにその世界は誕生した。それを、昔の誰かが『想力重界』という名前を付けたそうだ。

でだ、それが安定しているのは地球という星の力があるかららしい。地球の力によって人の想いは地球の表面に固定された。そして、この後ようやく問題が提起された。その世界を固定する力が地球の力のみであったから、想力重界は存在せしめた。だが、月の力がそれに混ざったらどうなるのか。人々は口ぐちに様々な推論を述べた。崩壊する。現状維持、つまり何も変わらない。その他もろもろ。

そして、昨夜、その結果が分かった。月の力が混ざったら想力重界は崩壊する。

もう、なんかそういう業界の人ではてんわやんわだったらしい。

どうして想力重界が崩壊を始めたのか原因を突き止めようと業界の人々は東奔西走したらしい。そして、どうやら一番早くその原因を突き止めたのがこの崇柱家だったらしい。最初は俺を殺そうとしたらしいが、星の力というものは、たとえ欠片といえども人のそれとは遥かに比べ物にならないくらい凄まじいらしい。俺を殺すことは諦めた、と言った。どうしたら想力重界の崩壊を止めることができるのか、必死に考えた結果、古の秘術を使うことで崩壊を止めることができるかもしれない、という結果が出た。

爺さんにちょっと整理したいから待ってくれと言って、話をスト

ツプしてもらっていた。

「よし、だいたいは分かった。でだ、古の秘術ってのは何なんだ？」

「それは、陽を陰に、聖を邪に、陰を陽に、邪を聖にする術式。モノの属性を変える大規模術式と呼ばれるモノだ」

「いまいちピンとこないんだが」

「月の欠片の『月』という特性を『地球』に変える。そうすることで、想力重界の安定を図るつもりだ」

「……それは百パーセント成功するのか？」

「分からぬ。それに、その術式はモノの属性、特性を反転する術式なのだ。前提からして問題がある、分かるか？」

「月の反対は地球ってのはなんか違う気がするんだが」

「そう、月の表裏を共にするのは主に太陽と考えるのが主流である」  
「う」

「じゃあ、その術を使っても意味がなくないか」

「だがしかし、このままでは想力重界が崩壊するのは時間の問題。可能性がどんなに低くとも、その可能性に賭けたいのだよ」

「なあ、想力重界とやらが崩壊すると何が起こるんだ？」

想力重界とやらはこの崇柱の爺さんたちが生業としているだろう業界の人にしか影響しないのだと思っていた。ならば、一般人である俺には何の影響もない。それに、その術式とやらで俺に悪影響などが起きるかもしれないと考えると、俺はこのまま夜光鴉とかいう連中と鬼ごっこをしている方がましである。

「……人の、人の思い出が消えるのだよ。想力重界の崩壊は、今生きている人の想いを巻き込むことになるだろう」

「それは推測だろう？」

「いいや、これはほぼ確実な事項だよ。現に、私たちのような術者は思い出が想力重界に引き寄せられているのを感じている」

「んなアホな話が……」

正直、信じられるモノではなかった。俺のせいで人の思い出が消える。とても現実味のないことだ。普通では信じられない。でも、

今は普通の状況じゃない。俺は普通じゃない。月の欠片を魂に宿している……らしい。

「なんとしても想力重界の崩壊は止めねばならない。だが、解決方法が分からぬ今、藁にも縋りたい思いなのだよ」

爺さんの顔に、哀しみが見えた気がした。思い出が消えることは、人生を失うことに等しい。長い時を生きた爺さんにとって、思い出は何にも代えがたい唯一無二のモノなのだろう。まあ、それは誰だつて同じだとは思っけれど。

「けどよ、俺は死にたくないぜ」

俺の命と引き換えに、この大事は収まるらしい。しかし、俺はそんな英雄にはなれない。普通の人間だ。突然、オカルティックな世界に巻き込まれ、そして命を捨てると言われて、はいそうですか、分かりました。と言つて命を捨てる覚悟を持っている訳がない。

「分かつておるよ。この事件は誰も悪くない。ただ、運が悪かつただけだ」

「慰めはいらない」

「別に慰めたつもりはない。ただ……いや、なんでもない」

「そうだ、訊きたいことが有るんだが、夜光鴉つてのはどういった奴らなんだ」

「ただ、より強い力を求める集団だ。力を求める奴らはその力の善悪など気にはしないからな」

疎ましい限りだ、と爺さんは顔をしかませて言った。

「俺の月の欠片を狙つてたみたいだけど、俺が死んだら月の欠片はどうなるんだ？」

「恐らくは本来の場所に返るのだろう」

「なら何でアイツらは俺を殺しにかかつたんだろう」

「ふん、どうせ奴らは何も考えてなんてない。月の欠片の保持者を殺すことで、殺した奴が次の宿主にでもなれるとでも考えているのだろうさ」

「……なあ、なんで俺は月の欠片の保持者になつたんだ？ つうか、

何で月の欠片が地球に来たんだ？」

「すまないが、私には分かん」

「そうか、じゃあ俺は帰ることにしよう。送ってもらえるかな」

「帰るのかな」

爺さんは残念そうな顔をして言った。

「俺はその秘術を受けるつもりはないよ。そんな危なっかしいモノに関わるぐらいなら、まだ夜光鴉とかいう変人どもに付き合う方がましだ」

「帰らせる訳には行かない、と言ったらどうする」

「そのときは、残念なことになるんだろうな、きつと」

俺と爺さんとの間に沈黙が流れ、部屋に静寂が訪れる。しばしの間、そんな状況が続いたが、それを爺さんの方が打開した。

「平介、お客がお帰りになられる。送って差しあげなさい」

と爺さんが言うと、背後の襖が開き、奏泉くんが現れた。

「最後に一ついいかな」

「何かね」

「崩壊まで後どれだけの時間がかかる？」

「……もって三日、早ければ明後日には」

「……じゃあな」

「崩壊までの間、我らは準備して待っている。気が変わったら来てくれ」

俺は何も答えず、無言で部屋を出た。玄関までの道は覚えていた。背後で襖が閉められるのが耳に入った。

俺は、これからどうするべきなのか、どうにも分からない。何をしたらいいのか、ここに来れば分かると思った。解決すべき問題が提起されるのだと思った。だがしかし、現実俺は俺

また刃を突き付けてきた。俺のせいで思い出が消える。本当に、本当に現実味のない話である。実際、今でも爺さんの話が本当かどうか疑っている自分がいる。おとといまでの自分なら、爺さんの話を小指の爪の先ほども信じたりなどしなかっただろう。

だが、今は状況が違う。俺は月の欠片とかい訳の分からないファンタジックなモノを宿し、しかもそれはかなりの大事を引き起こす。物語の主人公などに憧れたことがないと言えばうそになるが、しかし、このような形で主人公になるのなど勘弁してほしかった。これが夢であればいいのに、と思った。

「……痛いな」

「なにをしているんですか？」

「いや、なんでもないさ」

と、頬を抓る指を離した。

送ってくれるんだろ、と問うと彼は言った。

「ええ」

「君は、俺と爺さんの話を聞いていたのか」

「いえ、私は何も耳にしていません」

嘘も甚だしい、と思ったが青年の顔を見ると本当に『私は何も耳にしていません』といった感じだったので信じることにした。まあ、別に彼が話を聞いていたとしても、なんら問題はないのだけれど。

「君は、僕が憎くないのか」

「なぜ憎まなければいけないんですか？」

「……そうか」

「僕は長い物には巻かれるタイプなんですよ」

そして、俺たちは車までの道のりを何も話さずに歩いた。

「後部座席でいいかな」

「どうぞ」

「乗る前に、タバコを一本もらえるかな」

えっ？ といった表情を奏泉くんは浮かべた。彼が驚いた表情を初めて見た。まあ、当たり前だけど。会って間もないのだから。

「駄目かな」

「いえ、別にいいですけど」

そう言い彼はくれた。

「どうぞ」

「お、悪いね」

彼に火をつけてもらい、タバコに熱が生まれる。

煙を宙に吐いて、しばし何も考えずぼーっと過ごす。隣を見ると、彼もまたタバコを吸っていた。

煙が宙を漂う。風に乱されたそれは離散し、消える。

空を見上げると、太陽が沈みかかっていた。

「夕日ってさ、空気が汚い方が赤く見えるって知ってた？」

「いえ、知りませんでした。そうなんですか？」

「なんかの本で見たんだけどね。汚い方が綺麗ってのは、何だか皮肉だと思ったよ」

と言った所で、柄にもなく感傷的なことを言ったのに気づき少し恥ずかしくなった。

「と、灰皿かりていいかな」

「はい」

と言って彼は携帯灰皿をとりだした。

「悪いね」

「いえいえ」

「さて、じゃあ俺はまた寝させてもらおうとするかな」

「はい。快適な運転を心掛けることにします」

「ははっ」

そして、俺たちは車に乗り込んだ。

「一つ聞いていいかな」

「なんででしょう」

「月の欠片の保持者と会うのは怖くなかったのか？」

「最初は少し戸惑いましたが、命令には逆らえませんで」

「それにしても、俺も君も、社会人には向いてなさそうだよな」

「……そうでしょうか」

「俺がそう思っただけかもしれない。じゃあ俺は寝るとするよ」

青年は何も答えなかったが、別に何とも思わなかった。車の振動が妙に心地よく、俺はすぐに眠りに就いた。

## 第四話：逃避

「着きましたよ」

「……んあ？」

「到着です」

奏泉くんに起こされた俺は間抜けな声を出した。まだ寝ていたいと訴える脳を精神力でなんとか抑え、俺は車の扉を開け外に出た。

「あー」

と体を伸ばす。ばきばきと体が音を立てる。それが妙に心地よかった……、何だろう、さつきも同じようなことをした気がする。

「これを」

と奏泉くんにメモ用紙を渡された。四つ折りにされたそれを開くと、電話番号が記されていた。

「それは僕の携帯番号です。もしも用がございましたら、そこにおかけ下さい。では、失礼します」

そして、奏泉くんは去って行った。

俺は階段を上り、二階へと上がる。鍵を差し、開ける。いつも通りの手順で帰宅する。ドアを開けた先に広がるのは、いつもと変わらない俺のマイルーム、の筈なのだが。

「なんだよ、これ」

そう、俺は自分が口にした言葉と同様な感じのことを思っていた。ほんと、なんだよ、これ。

窓ガラスは破られ、カーテンは千切れ、パソコンは破壊されていた。ベッドも、冷蔵庫も、炊飯器も……嫌がらせにもほどがあるだろう。棚の上に飾っておいた写真。それも、一つ残らず“破壊”されていた。得体のしれない恐怖を感じた。

壊れていないテーブルの上に、封筒が一つ置かれていた。表面には何も書かれていなかった。封を開け、中から一枚の紙を取り出す。そこには、印刷された文字が羅列されていた。

『今夜一時。鳥林公園にて待つ 夜光鴉』

印刷された文字はそれだけ。他には何も印刷されていなかった。一枚の紙に、たったそれだけの文字しか印刷されていなかった。

「……なあ、月の精。出てきてくれないか」

小指の指輪に向かって言う。待つこと数秒。ふっ、と月の精が現れた。

「……これは酷くやられたものよ」

「なあ、何で俺がこんな目に会わなきゃいけないんだ？ どうして俺が、こんな……どうして……なんなんだよ月の欠片つてのはよ！

俺には訳が分からねえよ！ 崇柱家つてのはなんだよ！ 想力重界つてなんだよ、大の男が中二病ですかっ！ それに、お前も何なんだよ。お前は俺の幻覚なのかっていうか幻覚であつてくれよ！」

「……………」

月の精は何も言わない。

「……なあ、何か言ってくれよ。頼むから、何か言ってくれよ……たのむから……」

そんな哀れむような目で俺を見ないでくれよ。

「ただここで泣きごとを言っても、誰も助けてはくれない。現実逃避をした所で、なにも解決しない。我を恨むなら恨め。何も解決しないがな」

分かつてる。分かつてるさ。ここで俺が何を言おうが、何も変わらないことぐらい。何も解決しないことぐらい。

でも、何かを恨まずにはいられないじゃないか。

俺は、おとといまでは普通に暮らしていたんだ。ふつうの、本当に普通のただの大学生だったんだ。特殊な能力に憧れたりしたことはないとはいわない。物語の主人公になりたくなかったのか、と問われれば、俺はなりたかったよ、と答えるだろう。でも、それは軽い気持ちで、心の底から望んでいることではないだろう。娯楽の中のヒーローは誰かが力を貸してくれて、進むべき道がはっきりして、いい仲間がいる。そんなヒーローに、誰だって憧れるだろう

？ 憧れたから、こんな目にあつたのか？ 憧れたから、こんな仕打ちをしたのかよ、神様よお。ヒーローには簡単には成れるもんじやないとても俺に説教でもしたかつたのかよ。

意味のない恨みごととは分かつていても、俺はそれを止めることはできなかつた。俺は、とても弱い。

部屋をボロクソにされただけで、俺の心は限界を迎えかけている。「なんだよ月の欠片つてよお！ あるなら見せてみるよっ！ ここに出てこいよ、何で、何で俺なんだよ。何で……俺じゃなきゃだめだつたのかよっ！」

俺は、目の前の月の精に掴みかかつた。

「月の欠片つてのは何なんだよ、俺の中にあるって何だよ。魂なんて本当にあるのかよ！ お前は月の精なんだろ？ お前なら何とかできるんじゃないのかよ、なあ、もうヒーローに憧れないから、もう主人公になりたいなんて思わないから、頼むから、俺に平穩を返してくれよっ！」

月の精は、それまで俺と合わせていた目を逸らした。

「……………」  
「なんか言えよ。そうさ、俺は弱いさ。こんなことで精神がおかしくなるぐらいだ。意味が分かんねえんだよ。さっきまではさ、俺は少しばかり喜んでいたさ。いや、違う。喜んでいた差。俺は普通の人なんかじゃなくて、特別なんだ、とか思っていたさ。けど、けど違うんだよ。俺は、俺は本当は主人公なんか望んでいなかったんだ。俺は、俺は主人公の器じゃなかつた。そうだ、当たり前だ。俺に主人公なんて勤まらないんだよ、もとから。友達はいないし、頭は悪いし、かつこ悪いし、精神だつて弱い。すぐに調子に乗る。ここでもいるただの弱い人間の一人なんだよ。一般人なんだよ。一般人以下人間なんだよっ！ 物語の主人公を演じるような特殊な人間なんかじゃないんだよっ！ 頼むから、頼むからさあ……本当に……なんでこんなことになるんだろううなあ……………」

「……………」

それでも、目の前の月の精は何も言わなかった。俺は、月の精から手を放した。そして、台所へと向かう。俺は、かつこいい主人公にはなれない。クールなヒーローにもなれやしない。

台所も派手にぼろぼろにされていた。まったく、ここまでやってよく警察に通報されなかったもんだ。

「……もう、いいや」

包丁は少し歪な形をしていたが、まだ使える。

「……いや俺は、一応は主人公になれたのかもな」

包丁を逆手に持った。右手で掴み、その上から左手を。きつと、俺が好きな物語のヒーローとかは、自分を救い、世界を救うという恰好い手段をやったのけるのだろう。俺には無理だけどな。

「ははっ、ははははっ、逃げててもヒーローになれるなんて、とんだイージーモードだったな。まったく……」

両手を伸ばす。そして、心臓目がけて運動を開始する。時が、遅くなった気がする。ということは、これから走馬灯のように思い出がよみがえってくるのだろうか。

包丁の運動は止まらず、こちらに迫ってくる。けれど、それはとてもゆっくりだ。

そして、突如として目の前が暗転した。そして広がる映像。

幼稚園の運動会。父さんと母さんと妹が見に来てくれた。家族が見守る中で、俺はかけっこで一位をとった。ああ、みんなの笑顔が酷く懐かしい。

思い出に抱かれて死ぬのなら、それもいいのかもしれない。

が、俺は再び現実に戻った。

包丁は運動を止めていた。月の精が、目の前に居た。

「……………」

彼女は、包丁を俺から奪っていた。刃を握った彼女の右手からは、血がポタポタと滴り落ちていた。

「……何なんだよ。何なんだよお前はっ！俺が死ねば全て終わるだろう！全てが上手く収まるんだ。想力重界だとかいう訳のわか

らないモノの崩壊は防げるんだ！ 月の欠片だって、月に帰るんだろ？ 誰が困るっていうんだよ！ 友達はいないし、家族だって俺にはもういないんだぞ！ 死んだって、死んだって誰も悲しむ奴はいなんだぞ！ 死なせてくれよ！」

今度は、月の精は眼を逸らさなかった。その、銀色の瞳は、まっすぐに俺の目を見ていた。その目は、俺の心の中まで見ているようで、俺は思わず視線を逸らした。

「……ならば、なぜお主は泣いている？ なぜ、涙を流している？」「えっ？」

手を、目にやった。すると、冷たい液体に触れた。どうやら本当に俺は涙を流していたらしい。知らぬ間に。気がつくと、俺の涙は止まらなくなった。どんどん流れていく。今までにないぐらい、涙が流れた。

そういえば、俺はいつから泣いていなかったらう。

「生きたいのらう？ ならば生きればいい」

「……俺のせいで、俺のせいで人の思い出が消えてもいって言うのかよ」

「誰も、お主の死を悲しまない。誰も、お主のしたことに気がつかない。ああ、崇柱の奴らは気がつくか。だが、それ以外の奴らは、東海 光威のしたことに気がつかない。なぜ、そんな奴らの為に死ななければならぬ。なぜ、東海 光威が犠牲にならなければならぬ。下らない罪悪感の為に死を選ぶのか？ お前を何とも思わない幾億の人間の為に、その命を断つのか？」

「もう、生きるのは疲れたんだよ……俺のことを気にしてくれてありがとう。でも、いいんだ。だから、それを俺に返してくれ」

もう一度、俺と月の精の視線が交わる。

「どうして、そうまでして死にたいのだ」

「言っただらう？ 疲れたんだよ。あのとき、みんなと一緒に死んでればよかったのかもしれない。俺は余分に生きてしまったんだよ。もう充分に生きてさ。俺の心内は全部もうお前に吐きだした。お前



## 第五話：短い散歩

粉々に碎け散ったガラスを踏んでも大丈夫なように靴を履き、俺は救急箱を探す。

「お主は何を探しておるのだ？」

「いや、お前のその手、そのままって訳にもいかないだろ」

「ああ、これが」

「何でもないように月の精は言う。」

「こんなもの、ほれ」

そして、俺は目の前で不思議な現象を見た。みるみる内に傷口がふさがって行くのだ。

「……治せるならさっさと治せよ」

「なあに、この程度の傷、怪我の内にも入らぬからな」

やはり、こいつは人外の存在なのだと思えて理解した。救急箱を探した時間は無駄だったようだ。

「さて、約束の時間の一時まで後数時間あるけど、どうするか」

「お主、敵の誘いに易々と乗るといふのか」

「もしかしたら、アイツらが何か知ってるかもしれないし」

「何も知らないかもしれないぞ」

「それでも構わない。情報を得られる可能性があるなら、俺は向かおうと思う。まあ、大丈夫だろうよ。お前のあの刀もあるし、月の欠片だとかいうのもあるらしいし」

「さっきとは違ってかわって明るくなったな、お主。泣きごとをわめき散らしていた奴はどこへ行った」

「……やめてくれ、恥ずかしい」

やばい、冷静さを取り戻した今、さっきのことを思い出してみるととても恥ずかしい。俺は何てことを口走っていたのだろう。どうして、あんなにも取り乱したのだろう。

「ふむ、恥ずかしいとな。我も恥ずかしかったぞ、あんなにも自分

の心の内を赤裸々に吐きだすのを聞くのは」

それもそうだろう。俺だって、友人が本音を赤裸々に話してきたら……、友人が居たのはいつたい何年前のことだったろうか。最後に俺が友人と遊んだのは、小学校何年生の頃だったかな。幼稚園の頃は、俺はお調子者だった。友達もたくさんいたなあ、毎日外を駆けまわってた気がする。毎日、服を汚して家に帰り、母さんに文句を言われていたような気がする。もう、遠い記憶で、はっきりと思いだせない。

「どうした、ぼーっとして」

「いや、なんでもないさ……さて、ちよつくら掃除でもしようか。お前も手伝ってくれよ、さっき包丁を止められたんだから、物理的干渉はできるんだろう?」

「いや、我はお主を通してでしか干渉できぬ故、お主の掃除を手伝うことはできないぞ」

「おいおい、役に立たねえのかよ」

「ふん、では、役立たずは寝ることにしよう」

笑って言った月の精は、すうつ、と消えた。

そして、部屋の中で俺は一人残された。

「まったく、まあ仕方がないか。派手に荒らしやがって」

ブツクサと文句を言いながら、めちやくちやにされた室内の掃除に取り掛かる。というか、この壊されたモノを新たに揃えるのに金がかつこう掛かるだろうことを思い、自然とため息がでた。

今日の夜、夜光鴉に出会ったらまずは金を請求しよう、とかそんなことを考えながら、陰鬱とした気分で掃除を始めた。

掃除を始めるて数時間後、最後に掃除機をかけ、まあ少しはまともになった。

「おい、起きろバカ野郎」

右手の小指にはめられた指輪に声を掛けた。

「なんだ、どうした、我に何用か」

「何用か、じゃねえよ。とりあえず、出てきてくれ」

「仕方がない」

そして、消えたときと同じように、またふらっと俺の目の前に現れた。

「ほお、少しはまともになったではないか」

部屋を見回してそう言い放った。

「まったく、なにもこんな嫌がらせをしなくなっただっていいのにな。俺がいなかったらいなかったで、また出直せばよかったのにな」

「相手を怒らせた方が、来るとでも思ったのだろう。お主は、あまりにも弱過ぎて死のうとしたがなあ。流星に夜光鴉とかいう奴らも計算外だったと思うぞ」

と笑いを堪えながら言ってきた。なんだかコイツは、さつきから俺をバカにしかしてきてない気がする。

「もう蒸し返さないでくれ。さてそろそろ鳥林公園にでも向かおうと思う」

「それはどれくらい時間が掛かるのだ？」

「そうだなあ、歩いて15分程度かな」

「刀は貸すでな、我は指輪に隠れていよう」

そして、着物の袖からまたあの日本刀を取り出した。それを俺に渡すと、さつき出てきたばかりだということにもう指輪の中へと戻ってしまった。

「おいおい、どんだけ寝たいんだよ、お前は」

時間を律儀に守る理由もないが、守らない理由もない。一時に間にあつように、部屋を出た。

階段を下りた先には、なんと奏泉くんの姿があった。

「こんばんは」

と爽やかに声をかけてくる奏泉くん。一体全体、どうして奏泉くんがここにいるのだろう。

「じつ、こんばんは」

疑問に思いながらも、何故か普通に返事をしてしまった。

「夜光鴉の動きを掴みましてね。いやあ、すみません。こちらの不

手際で随分と酷い目にあってしまったようで」

奏泉くんはどうやら俺の部屋が荒らされたことを知っているようだ。ということとはだ、もしかして俺がわめき散らしたことも知っているのだろうか、という嫌なことを推測してしまった。

だが、それをどうやって確かめるといえるのか。なあ、俺がわめき散らしたことも知ってるか、とでも問うのか。いやいや、それはいくらなんでも雑だろう。というか、わめき散らしたなんてことを相手が知らなかった場合は俺は墓穴を掘ることになる。もうここは、何も聞いてはいない、という可能性に賭けよう。

「なぜ、俺の部屋が荒らされたことを知っているんだ？」

「いえ、夜光鴉の動きを探ってる者が居るのですが、その者から連絡があります。貴方の部屋を観察しているわけではないので、ご安心ください」

そう言われても、なんか安心はできないんだが。

「で、こんな夜遅くにどちらへ向かうおつもりですか。そんな物騒なモノを手に持って」

「いや、ちよつと散歩にね」

なぜ、こんな変な冗談を言ってしまったのかは分からない。けれど、何故か言いたくなかったのだ。

「はあ、散歩ですか。ご一緒してもよろしいですか？」

奏泉くんは終始笑顔を決やさずに会話を続ける。

「いやいや、それよりも奏泉くんはどうしてここに居たんだ？」

「夜光鴉たちの被害を受けてしまったでしょう。こちらが貴方をお呼び立てしなければ、物品を壊されることもなかったと思ひましてお詫びと、弁償をと当主から命を受けました所です」

あの爺さんがそんなことを。まあ、ありがたくそれは受け取っておこつと思つ。

「で、散歩の方はご一緒しても？」

「男と散歩してもつまらないだろう？」

「いえいえ、少しお話ししておきたいこともございますので」

「いや、でも、今はちょっとまずいかな」

「どうしてです?」

なぜ、そんなにも突っかかって来るのだ、奏泉くんよ。

「いや……」

もう、言ってしまおう、そう思った。

「これから、夜光鴉たちと会うんだ」

「だったらなおさらついて行かせてください」

「でも、危ないぞ、多分」

「大丈夫です。こんな僕でも少しばかりは戦いの心得はありますから」

ああ、確かに。当主の側近ばいし、それなりにきつと強いのだろう。だったら、まあいいか。

「じゃあ、一緒に行きますか」

「どこへ向かうのですか」

「鳥林公園に一時ということだったけど」

「なら、車じゃなくてもよさそうですね。では、参りましょう」

なぜ、君が仕切るのか。そして、どうして君が先に行くのか。仕方なく俺は奏泉くんの後を追う。

「鳥林公園ですか」、それってどこです?」

「……次、そこを右に」

おいおい、知らなかったのかよ。というか、知らないなら何で俺の先に行くのか。

「なあ、夜光鴉つてのはさ、一体なんなんだ?」

「当主さまからお聞きになりませんでしたか?」

「いや、何かよくは話してくれなかったんだ」

「ああ、そうですね。それも仕方ないかもしれませんね。何せ、彼らの頭は、現当主、崇柱美邦さまの息子なのでから」

「……マジで?」

「ええ、マジです」

何と言うか、何とも言い難い。やはり、力を持った人というのは

何かしら方向が狂ってしまふのだろうか。

「どうして、って訊いても教えてくれないか」

「いえ別に、構いませんよ。私は、彼が嫌いですし」

「彼って、あの爺さんの……失礼、現当主の息子がか？」

崇柱 美邦のことを爺さんと言ったときの奏泉くんの視線が少しばかり怖かったので、言い直した。

「ええ、彼は崇柱を継ぐにはふさわしくない者でしたから。天才だともてはやされ、それで調子に乗ってしまったのしようね。力に振り回されて、道を踏み外したのです。彼は、私にとって、兄といっ  
ていいような存在を、手にかけたのです」

俺は、奏泉くんがさらつと言ったことを、さらつと受け止めることはできなかつた。こんな話をされたとき、どう反応したらいいのか、俺には分からなかつたから、無言でいることしかできなかつた。  
「ああ、別に気になさらずに。手にかけたといっても、わざとではなかつたらしいですね。ただの事故、そう事故だったのですから、ただの事故だったのですから」

事故だったのですから、そう繰り返す奏泉くんの顔は、いつも通りの微笑を浮かべた顔だったけれど、その微笑は少し崩れかけていた。

「失礼、少し取り乱してしまつたようです。まあ、そういう訳で、彼は崇柱の家を追放されました。そして、幾らかの年月を経て、彼は夜光鴉という集団を結成しました。人を殺してもなお、彼は力を求めた。私には、どうしてそうまでして力が欲しいのは理解できませんが、貴方は、そんな彼の思考を理解できますか？」

「……どうだろう、俺には、よく分からない、かな」  
俺には、力を求める人の気持ちからなくもないかもしれない。ヒーローに憧れるように、誰だって、強い力を求めることはあるのだと思うから。

「ははっ、すみません、つまらない話を混ぜてしまつた。もっと客観的に話せるようになったらいいのですが、どうも私には難しいよ

うです」

そして、奏泉くんは話をガラッと変えた。最近流行の歌手グループの話やドラマの話、俺はどれも知らなかったが、彼の話はうまく、面白く聞けた。

そして、俺たちは目的の『鳥林公園』を目の前にした。

「ああ、下らない話をしていたら、もうついてしまいましたね」

「……じゃあ、行こうか」

ふう、と息を吐き、俺は、奏泉くんは、公園の中へと足を踏み入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4551v/>

---

月の欠片が落ちてきた

2011年8月7日03時26分発行